

平成30年3月19日(月)

老球の細道399号

## 「勝つこと」と「良い人間になる」の両立

会津バスケットボール協会 室井 富仁

私の幼少時のアスリートの英雄と言えば、なんとってプロレスラー「力道山」を思い出す。外国人の悪レスラー達を空手チョップで縦横無尽にやっつける姿は、私だけではなく当時の日本人全体に勇気を与えてくれた。ところが後に、無敵の正義の味方であった力道山がバーでチンピラに刺されて死亡するという事件があり、力道山に対する憧れと夢は幻と化してしまった。

最近でも品格を重んじる横綱力士がカラオケマイクで後輩力士を殴ったり、五輪を目指すトップアスリートがライバルの飲み物にドーピング操作をしたりと、アスリート以前に人間性を疑われるような事件が頻発している。スポーツのトップに君臨する者は人間的にもすばらしく、若者の模範であってほしいと思うのは私だけではないだろう。

こんな状況の中で最近ホットな情報を知った。今年8月に米フロリダで開催されるNBA主催の初のユース世界大会において、大会期間中にオフコートでの活動やライフスキルの獲得の指導、啓蒙にNBAが乗り出すという。このプログラムを担当するのがPositive Coaching Alliance (PCA) という米国NPO団体。この団体のミッションは「ユーススポーツを変革せよ、さすればスポーツは若者の変革をもたらす」。モットーは「Better Athletes, Better People」。具体的には「勝つことと良い人間になることの両立を目指すコーチング哲学の構築」。

このPCAはスポーツを通じて、ポジティブな人間性を育むことができると説く。ポジティブな態度とは「より多く、より早く学習する」「より良い決断ができる」「逆境に強くなる」「常に前進する」という特性を持った人間であり、それこそがアスリート(スポーツに打ち込んできた人間)の最大の魅力としてとらえる。

日本においてもラグビーや野球の関係者によってPCAの理念が広められている。アメリカではNBAの著名なコーチがこの理念に賛同の意を表明している。ステイブ・カー、ドック・リバーズ、ブラッド・ステイブンス、フィル・ジャクソン等錚々たるメンツ。

昨今日本のスポーツ界においても勝利至上主義による暴力指導、ハラスメント指導、ネガティブ指導が否定され、これらの指導で選手が委縮し実力を発揮できなかつたり、やがて競技が嫌いになりリタイアするケースなどが是正されようとしている。日本体育協会のコーチングスタイルモデルにおいても、勝つための「技術、戦術」指導と、人間力向上のための「育成」指導の「ダブルゴール」哲学でのコーチングスタイルが推奨されている。

コーチの神様ジョン・ウッデンもすでに半世紀前から独自の「成功のピラミッド」の哲学において、「努力」「情熱」を礎とし、チームワークを形成する「友情」「忠実」「協力」などの人間力の向上を成功の土台の要素とした。そして最上段に位置する要素も人間性にかかわることで「信念」「忍耐」等を掲げ、NO1、オンリー1になり、やりがいのある、価値あることを成し遂げるには人間力を高めなければ不可能であることを看破していた。

人間力が高めることで厳しい練習をこなし、人間力が高まることで大舞台でも普段通りの実力が発揮できるようになる。コーチは人間的な成長をオンコート、オフコートで選手に促すだけでなく、自らも人間的成長を目指して日々精進することは言うまでもない。